

# 伝教大師最澄ゆかりの山王山

## 長崎県の五島列島

五島列島は九州本土の長崎や佐世保の西海上 60 km から 100 km 沖に浮かぶ大小 140 の島々をいいます。現在はそのうちの 27 の島に人が住んでいます。中通島より北になる宇久島と小値賀諸島は五島に含めない考え方もありますが、地形的あるいは歴史的に考えると五島に含める方が自然のようです。五島の名前は福江島、久賀島、奈留島、若松島、中通島の主要 5 島を合わせたところからきてると一般的にいられていますが、古くは「値嘉嶋」「知訶嶋」などと呼ばれていました。

奈良時代の肥前国風土記では「値嘉嶋（ちかのしま）」という表記がみられ、五島列島の福江島、久賀島、奈留島あたりを大値嘉（おおちか）といい、中通島、小値賀島、宇久島を合わせて小値賀（おちか）といったそうです。これは景行天皇が庇良島（現在の平戸島）に巡幸された時に志式（しじき）の地から見て遠くにあるのに近くにあるように見えたことからといわれます。この値嘉島の名前が現在に継承されるのが「小値賀島（おちかしま）」です。「五島」の表記は鎌倉時代の終わり頃の『青方文書』に見られるようになります。

一方、日本の中世の戦国時代に暗躍した中国人の海賊の頭目で「五峰（峯）王直」という人物がいました。王直は五島列島の中通島に居城を構えたといい、その居城は中通島の小手ノ浦という複雑な入江を見下ろす小高い山のまわりにそれとみられる石垣積みが残されています。その後王直は平戸に居城を移しました。この五峰というのは中国における五島列島の古い呼び名です。中国では「峰」という字に「島」の意味もあるそうですが、海上に浮かぶ 5 つの峰だということでしょうか。



長崎県 五島列島位置図

## 遣唐使とその航路

奈良時代から平安時代の始めにかけて、日本から当時文化が進んでいた唐（中国）に向けて、文化の導入を目的に遣唐使を送りました。遣唐使の使命は大陸文化の導入や経典の入手にあり、舒明（じょめい）天皇二（630）年より宇多（うだ）天皇の寛平六（894）年までの 260 年間、唐の首都長安に大使、随員、留学生、留学僧などが渡航しています。

入唐の経路ですが、難波の三ツ浦（大阪・三津寺町）を出航し瀬戸内海、関門海峡を通過して、筑紫大津浦（博多）に寄港し、諸準備を整えて、玄海・壱岐・対馬・百濟（朝鮮西海岸）・三東半島を経て入



風雨に遭い、引き返します。しかし最澄は都に戻らず、大宰府に入り竈門山寺で遣唐使船四隻の航海安全を祈願し、梅檀（せんだん）の薬師仏四体を作ったといひます。このときの第一船には留学生（るがくしょう 長期留学僧）空海も乗り組んでいました。最澄は還学生（げんがくしょう 短期留学僧）として第二船に乗り組みます。翌延暦 23（804）年、改めて出航すると、五島列島の田浦を出た後、暴風雨に見舞われますが、辛うじて中国大陆、明州の寧波に渡ることが出来ました。

最澄は唐の天台山で道邃（どうずい）などから天台仏教を学び、帰路の船待ちの時間を使い越州の順暁から密教を学びました。延暦 24（805）年 5 月 18 日、遣唐使船（第一船）で明州を出立すると、6 月 5 日、対馬の阿礼村に流れ着きました。五島を目指したとすれば北に偏りますが、無事帰国を果たします。帰国後、天台系の仏教を日本に広め、日本における天台宗を創設すると共に比叡山延暦寺を拠点に大乘の教えを定着させることに奔走します。翌年には空海も無事帰国を果たし、この時の遣唐使は日本の仏教界に大きな結果を残しました。

### 帰国後の最澄と九州、五島

延暦二十四（805）年に無事帰国した最澄は、弘仁三（812）年に大阪の住吉大社へ参詣しました。渡海の願いが叶ったことを感謝して一万燈を供え、大乘を称えたといひます。続いて弘仁五（814）年、九州に赴き、大宰府の竈門山寺において造像や写経をおこない、賀春（香春）の神宮寺では『法華経』を講ずるなど、無事帰着のお礼をしています。（叡山大師伝）。また、弘仁年間に五島・福江島玉ノ浦の白鳥宮に自作の十一面観音を奉置のため参詣したといひます。（玉ノ浦郷土史）さらには、同九年（818）にも大宰府の竈門山寺を参詣したといひます。

これらの九州来訪の目的は無事に唐に渡れたこと、そして目的を果たし無事に帰国出来たことに対する感謝であり、お礼の報告でありました。

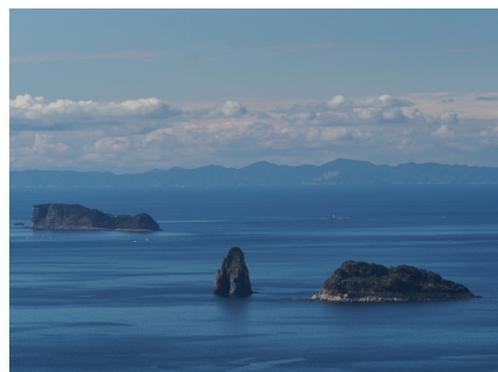
帰国を果たした最澄は、日本の護国を祈念するために六所宝塔の建立を發願しました。弘仁九年の記録では東西南北、それに中と総を加えた六ヶ所で安北宝塔を下野国に、安東を上野国に、安西を筑前国、安南を豊後国、安中と安総（安国）を比叡山中にあると記されています。安中と安総は比叡山の西塔と東塔です。また安西塔は麓に竈門山寺がある宝満山の中腹に建立されました。

弘仁五（814）年と同九年（818）に九州を参詣した最澄は、五島列島の白鳥宮にも十一面観音像を奉置しているといひます。このことは五島を出航するにあたり、白鳥宮に航海安全の祈願をしたから、その感謝の気持を報告に来たということになります。また、五島列島に来たのであれば、記録には残されていませんが、白鳥宮のある福江島以外の島を訪れた可能性は十分にあるはずで

九州来訪の後、弘仁十三（822）年 6 月 4 日、最澄は比叡山中道院にて寂滅されました。時期を同じくして、最澄が熱望した大乘戒壇の独立が許されました。さらに、貞観八（866）年最澄には伝教大師の諡号が勅諡されました。日本における大師号の最初になります。



山王山 左 雄嶽 右 雌岳



長崎の外海から山王山

## 五島の山王山と最澄

五島列島中通島の中央よりやや南の付近に「山王山」という山があります。この山の標高は 439m で新上五島町の中では二番目の高さになります。またこの標高 439m の山を「雄嶽」、その南東に聳える標高 402m の山を「雌岳」といい、いわゆる双子の山になります。山王山（雄嶽）は古くは御嶽（御岳）といい中世の『青方文書』には「三日の御たけ」あるいは「みかさんのう」などと名前がみえます。この山王山ですが、名前の通り頂上に大己貴命（おおなむちのみこと）をお祀りした雄嶽日枝神社が鎮座し、山王信仰の山です。特に南北方向から見たときにピラミッドのような尖った山容が印象的で、離れた場所からでもよく認識できるので、古くから航路目標となっているようです。またこの山王山はその山容から山自体が信仰対象になり易いと考えられます。また、雌岳も同様なピラミッド状の山容で、離れた場所から、双方あるいはどちらかが認識できます。

ところで、この山王山にはいくつかの伝えがあります。まず、この山王山は、伝教大師最澄によって開かれたというものです。最澄が遣唐使で無事帰国のお礼としてこの山に山王の神を祀ったといわれるものです。これが現在の雄嶽日枝神社につながり、神社では 2019 年に 1200 年祭が執り行われます。また、もうひとつの伝えとして、比叡山延暦寺の「不滅の法燈」が万が一消えた場合は山王山に来て燈をつけて帰る、というものです。こちらは隣の小値賀島の浄善寺（天台宗）に伝わるものです。いずれにしてもこの山王山が遣唐使や伝教大師最澄、比叡山とのつながりを示すものとして注目されます。

弘仁年間に最澄が福江島の白鳥宮にお礼をしたと考えれば、この山王山まで来ていることも決して不思議ではありません。また、五島近海から航路の目標とされたということは、遣唐使が五島すなわち日本から離れる時にも自然と目に映り、中国から五島すなわち日本に無事帰った時も同様です。その際、いかにも神が宿りそうな山の姿に向かい手を合わせ、航海安全を祈り、また無事帰着の感謝をすることがあったとしても自然な行いではないでしょうか。日本を離れる時には、この山が次第に遠くなり見送ってくれ、日本に帰着する際には次第に近づき、この山が迎えてくれるのです。

最澄の場合、渡唐の折には五島列島の田ノ浦から東シナ海に向いますが、帰国の折は、白鳥宮や山王山がある五島列島には到着せず、北に流され対馬の阿礼村に到着しました。したがって、年をおいてから無事帰着の感謝と報告に五島まできたとも考えられ、このことが「最澄が危険な航海からの無事帰国に感謝し、その御礼としてこの山に山王神を勧請した」という伝えにつながるのではないのでしょうか。

山王山には、中腹にある断崖下の岩陰に一ノ宮、八合目附近の岩窟近傍に二ノ宮が祀られました。その二ノ宮岩窟には後年に多数の銅鏡が奉納され、古いものでは宋の時代の舶載鏡から近世期の鏡まで各時代の鏡が発見されたことから、中世以降も信仰が続けられていたことがわかります。

さらには、中腹の一ノ宮に隣接する谷奥には「孝行の滝」があります。現在は砂防ダムの影響で水量が減ったため、水量の多い時に現われる「幻の滝」で、雨後などに非常に美しい姿を見せます。

この地に山王信仰が根付いたことは、五島列島と遣唐使あるいは最澄を結びつける古代歴史の重要な鍵になるのではないのでしょうか。



山王山 雄嶽日枝神社 遥拝所



山王山 雄嶽日枝神社 一ノ宮（一之宮神社）



山王山 雄嶽日枝神社 二ノ宮 (跡) 岩窟



山王山 雄嶽日枝神社 (三ノ宮)

## 地元郷土史にみる山王山

### 1 雄嶽日枝神社 (山王神社)

山王宮は現在山王山に鎮座する雄嶽日枝神社古来の称号である。神社社記に「神社啓蒙に云或問弥山王奈何日ク比名非上古言也、五十二代嗟峨天皇弘仁十年始称且按鎮座記小比叡神始頭比ノ山云々 (以下略)。」とあるが、これは比叡山日吉山王の縁起書とみられる。また、小値賀浄善寺 (天台宗) 住職について聞けば、「荒川山王山は比叡山の御分霊で比叡山の消えずの燈明が万一消えたときは、山王山に来てつけて帰る。」という伝説があった。

山王の霊域は、山王山 (古称御嶽) の南麓荒川より登山やや八合目程度に原始叢に囲まれた区域内に岩窟がある。岩窟内の奥は突角で狭く小石祠を建立されている。この岩窟の内外より先年出土した遺物に、鎌倉、室町、江戸初期の各和鏡、平安末期の支那八稜湖州鏡、外に一獣一龍鏡の一面がある。

(若松町郷土史より抜粋)

### 2 最澄と山王山

最澄は延暦二十四年 (805) 16 回遣唐使第二船に乗船、値賀島 (五島) に帰着、帰朝後、弘仁五年 (814) と九年 (818) の二回にわたり、大宰府竈門山寺に無事帰着のお礼参りをしている。(叡山要記)。また、玉ノ浦白鳥宮に自作の十一面観音奉置のため参詣した。(玉ノ浦郷土史 五島編年史から)「山王」は日吉神祇の称号で、山王神道の発生は最澄が日吉山王の神を延暦年間に比叡山延暦寺に祀られたのが創まりといわれている。「最澄は延暦寺を創建するにあたって、大山祇神を山下に還し (小比叡・本地薬師)、大日貴神を山王権現と尊称して、天台宗の守護神となし、釈迦の垂迹なりと称した。これが所謂山王日吉 (大比叡) で天台神道の本体をなすものである。はじめ山王と称するのはこの二社からである。後年日吉山王の二十一社が完全に成立するに至ったのは室町時代に入ってからである。」(神道沿革史論)

本町の遣唐使船寄泊地は合蠶田浦 (青方浦) と橘浦 (三日ノ浦) の両港であるが、この両港の深部にあたる突端部には、山王権現 (大日貴神)、別当寺 (観音) が創起されていた (青方神社旧称・山王権現と別当寺の松音寺)。青方山王権現別当寺 (松音寺) は明治に神仏混合廃止により廃寺となり、本尊観音菩薩は、長福寺に安置されている。

(上五島町郷土史より抜粋)

### 3 本倉寺屋敷跡

本倉 (元倉または本浦の名前もあった) の地には古祠時代より奥之院祭祀の寺屋敷があり、五輪塔、宝篋印塔 (ほうきょいんとう) がある。

(若松町郷土

史より抜粋)

寺屋敷跡は古祠山王祭祀基地として鎌倉時代に第二次的に起こったものと推測する。その内容はそもそも山王権現を祭るところ天台宗派の寺院があり、天台寺院のあるところたいてい山王を祀るのはつきものであるから、この繋がり、この跡地にいわゆる神宮寺のようなお寺が存在していたと推測できる。「神宮寺とは神社に付属する寺院の称で、また神宮院その他多数の寺名があった。(この住僧を社僧という。)常に仏事を修めて神に仕えたのである。跡地の寺院名は伝わっていないが、昔をしのんだ称呼であり、古祠山王の祭祀は江戸中期に一旦廃絶したが天和3年(1683)霜月、平戸藩主松浦肥前守源鎮信公によって再興されているので、その頃から起こったものであろう。そして現在の麓荒川は第三次の祭祀基地にあたるが山王旧登山道は跡地の上手にあったと伝えられている。それが、数十年前この方面に山火事が起こり、このときこの道路跡がはっきり現れたのであった。また、跡地には旧神宮宅跡という箇所があり、そこから板碑所在の峠に往復したという直通的の山道が、林叢(りんそう)中に残っていることも明らかになったが、この旧道路は現在の参道とは別である。(古老談)

(若松町郷土史より抜粋)



山王山 (雄嶽) 龍観山から



山王山 (雄嶽) 麓の荒川から



山王山 孝行の滝



二ノ宮岩窟に奉納された船載鏡



元倉寺屋敷跡(推定)の中世石塔



元倉峠 金比羅神社の中世板碑

一之宮神社（一ノ宮）

